40 Days of Depth

LENT SPIRITUAL GROWTH

BE TRANSFORMED THROUGH

CONNECTION
PRAYER
DEVOTION

日本語

KOBE UNION CHURCH

KOBE UNION CHURCH 2025

はじめに (Introduction)

このデボーションは、イースターまでの 40 日間、主とのより深い歩みへとあなたを導くために作られました。
このデボーションの旅を進む中で、聖霊があなたに語りかけてくださるよう心を開いてください。神の言葉を黙想し、デボーションを振り返り、読んだ内容について誰かと分かち合うことで、主とのより親密な関係へと歩み始めることを願っています。
一緒に旅をしましょう！
オンラインまたは対面で、この 40 日間、私たちと一緒に参加してください！

第1週

穏やかな水面
3月6日 – 3月8日

第2週

上昇する潮
3月10日 – 3月15日

第3週

隠された深み
3月17日 – 3月22日

第4週

打ち寄せる波
3月24日 – 3月29日

第5週

安定した流れ
3月31日 – 4月5日

第6週

開けた水平線
4月7日 – 4月12日

第7週

生きる岸辺
4月14日 – 4月19日

40 DAYS OF DEPTH

第1週

穏やかな水面

3月6日 – 3月8日

KOBE UNION CHURCH

第 1 週:　穏やかな水面 (Calm Waters)
3 月 6 日

聖書朗読箇所: ヨエル書 2:12-13

主は言われる、「今からでも、あなたがたは心をつくし、断食と嘆きと、悲しみとをもってわたしに帰れ。あなたがたは衣服ではなく、心を裂け」。あなたがたの神、主に帰れ。主は恵みあり、あわれみあり、怒ることがおそく、いつくしみが豊かで、災を思いかえされるからである。

人の道は常にさまよい続けますが、神の道は確かです。人は潮のように漂い、自身の欲望の流れに揺れ動きます。しかし、どの時代においても、主は呼びかけます。「心を尽くしてわたしに立ち返りなさい。」これは表面的な呼びかけではなく、分かれた心を許すものでもありません。主は衣を裂くこと、外面的な悲しみの表現を求めているのではなく、心の裂けること、自己の意志が神の前で砕かれることを望んでおられます。

悔い改めとは単に罪を悲しむことだと私たちは思いがちです。しかし、本当の悔い改めは感情以上のものです。それは方向を変え、キリストに属さないすべてを捨て去ることです。祭壇の前で涙を流しても、変化なく通常に戻るだけでは不十分です。主が求めておられるのは、自己の意思を主の目の前で砕き、全てを主に委ねる心なのです。

多くの人が、自分自身を手放さずに神のもとへ戻ろうとします。彼らは神のそばにいたいと願いながらも、自分の人生の主導権を手放そうとしません。しかし、主はご自身の御座を誰とも分かち合われません。真に主のもとへ帰るとは、すべてを明け渡し、自我を十字架につけ、キリストが支配されることを受け入れることです。

この招きの美しさは、それを呼びかける主の本質にあります。主は恵みに満ち、打ち砕かれた心を拒むことなく迎え入れてくださいます。怒ることを抑え私たちの失敗に忍耐強くあられます。主は愛に満ちておられ、それは主ご自身の本質です。もし主が裁きを思いとどまられるとすれば、それは私たちの価値によるのではなく、その大いなる憐れみによるのです。

主のもとへ帰る時は、常に「今」です。もっと都合のよい時を待つのでは

なく、感情が動かされるのを待つのでもありません。「今こそ」と主は言われます。私たちの全存在をもって主のもとへ帰りましょう。すべてを明け渡し、主が私たちのうちにその御心を成し遂げられるようにしましょう。

「あなたが他のすべての虚しさを知るまでは、キリストの満ちた豊かさを知ることはできません。」

— チャールズ・スポルジョン

3 月 7 日

聖書朗読箇所: マタイによる福音書 8:8
「ただ、お言葉を下さい。そうすれば僕は治ります。」

私たちの霊的な旅の中で、神の権威の偉大さに直面する瞬間があります。そして、その時の私たちの応答が、信仰の深さを明白にします。百人隊長は、権威と命令に慣れた者として、多くの人が理解できない重要な真理を悟っていました。それは、イエスが物理的にそこにおられなくても、状況を変えることができるということです。主がただ語られるだけで、それは成し遂げられるのです。

私たちは、神の力を目に見える臨在によって制限しがちです。しかし、この百人隊長との出会いの中で、イエスはご自身の言葉が時間や空間に縛られないことを示されました。百人隊長は、イエスの権威が人間の限界を超えていることを理解し、ただ語られる言葉だけで癒しがもたらされるという驚くべき真実に信頼を置いていました。

信仰とは、目に見えるものや触れられるものではなく、神がすでに語られたことに基づくものです。すべてが自分の期待通りに進んでいる時には、神を信じることは容易でしょう。しかし、本当の信仰が試されるのは、神の目に見えない力を信じるよう求められた時です。主の言葉が、私たちの理解を超えたことを成し遂げると信頼することです。「ただひと言おっしゃってください」と発言することは、どれほど遠く、どれほど不可能に思える状況であっても、イエスの権威がそれだけで十分であると認めることなのです。

キリストの招きは、目に見える証拠に依存するのではなく、神が最高の権威であるという理解の上に立つ応答を求めます。あなたは今日、主の言葉にどのように応えますか？ 目に見える形で「現れる」ことを待ち望んでいますか？ それとも、主の声だけであらゆる状況を変えることができるというシンプルな真理に信頼を置いていますか？
イエスは百人隊長に言われました。「あなたの信じたとおりになるように。」（マタイによる福音書 8:13） これこそ弟子としての歩みの核心です。単に口先でイエスについて語るのではなく、私たちの生き方をもって従うこと。 「見えなくとも信じます」という信仰こそが、神を喜ばせ、その御手を動かします。百人隊長は、イエスが目の前におられることを必要としませんでした。彼が必要としたのは、イエスの言葉に、不可能を可能にする力があると信じることだけでした。

あなたは今日、イエスの言葉をそのまま信じる準備ができていますか？

「信仰の最大の試練は、神が神であることを受け入れることです。」

— オズワルド・チェンバース

3 月 8 日

聖書朗読箇所: 詩篇 51:10-12

「神よ、わたしのために清い心をつくり、わたしのうちに新しい、正しい霊を与えてください。わたしをみ前から捨てないでください。あなたの聖なる霊をわたしから取らないでください。あなたの救の喜びをわたしに返し、自由の霊をもって、わたしをささえてください。」

神が人の内面で成し遂げる最大の御業は、その人を通してではなく、その人の内側で起こるものです。多くの人は、新しく変化していない心のままで主に仕えようとし、外側の働きが内側を覆い隠せると考えます。しかし、ダビデはこの真理を理解していました。どんな行いも、努力も、犠牲も、彼の心を清めることはできません。ただ神だけがその御業をなすことができるのです。

人は自分自身を改革することはできても、清い心を創造することはできません。古いものは修復されるのではなく、新しくされなければなりません。本当に自分自身を砕いた者はこれをはっきりと悟ります。自分の内には何一つ信頼できるものがないことを。自分の力も、熱心さも、悔い改めすらも、十分ではありません。彼はただの矯正を求めるのではなく、新しい創造を求めるのです。

しかし、ダビデは清い心だけを求めたのではありません。彼は揺るがぬ霊も求めました。なぜなら、どれほど心が清められても、すぐに罪へと戻ってしまうなら、何の意味もないからです。本当に神を求める者は、ただ赦しを願うのではなく、義の中を歩む力を求めるのです。

「どうか、私をあなたの御前から退けないでください。」 ここに、罪の本当の悲しみが表されています—それは単なる結果ではなく、神の臨在を失うことです。ひとたび神の近さを味わった者にとって、主から遠ざかることほど苦しいものはありません。これは、神との親しい交わりを知る魂の切なる渇望であり、決して離れることに耐えられない心の叫びなのです。

しかし、神の憐れみは私たちの失敗よりもはるかに大きいのです。罪が救いの喜びをかすませることはあっても、救いそのものを消し去ることはできません。だからこそ、ダビデは祈りました。「あなたの救の喜びをわたしに引き戻してください。」（詩篇 51:12） 救いは失われるのではなく、罪が私たちを神から遠ざけるとき、その喜びが薄れてしまうのです。しかし、私たちが神のもとに立ち

返るとき、主はただ赦すだけでなく、引き戻してくださいます。喜びを、力を、そして主に従いたいという心を。

この四旬節の時、私たちは自分自身を修復しようとする努力をやめ、代わりに、創造し、新しくし、引き戻すことのできる唯一のお方に、すべてを委ねましょう。

「神が御霊で満たされるのは、御霊の満たしを信じる者でも、御霊を求める者でもなく、神に従う者である。」

— A.W.トーザー

40 DAYS OF DEPTH

第2週

上昇する潮

3月10日 – 3月15日

KOBE UNION CHURCH

第 2 週:　上昇する潮 (Rising Tides)

3 月 10 日

聖書箇所: イザヤ書 1:18

「主は言われる、さあ、われわれは互に論じよう。たといあなたがたの罪は緋のようであっても、雪のように白くなるのだ。紅のように赤くても、羊の毛のようになるのだ。」

神の招きは明確です。「来なさい」と。
神は人々が自らを清め、ふさわしさを証明し、行いを正してから近づくのを待ってはおられません。神は、罪の中にあるまさにその時に、罪人を呼ばれるのです。必要としているのは正しい人ではなく、打ち砕かれた者、汚れた者、罪にまみれた者なのです。

緋色や深紅…深く消せない染み。古代の世界では、緋色の染料は繊維に深く結びつき、どんなに洗っても取り除くことができないほどの永久的なものでした。罪が魂に刻みつける印も同様であり、人間の力では取り除くことができません。どんな努力も、どんな道徳的な精進も、どんな儀式的な清めも、その存在を消すことはできません。しかし、私たちにできないことを、神はしてくださるのです。

ここで、神は部分的な清めを提供されるのではありません。神は「変革」を約束されています。深紅のように赤い罪が、雪のように白く、汚れなく、純粋で、新しいものとされるのです。これは人間の努力の結果ではなく、神の恵みによるものです。主は罪と妥協することはありません。主はそれを完全に洗い流してくださいます。

しかし、この約束は自動的に与えられるものではありません。それは「今来なさい、さあ論じ合おう」という招きと共にあります。神は救いを無理やり押し付けることはされません。神は呼びかけ、招き、差し出されるのです――しかし、それに応えるのは私たちの役割です。

神と論じ合うということは、神と口論することではなく、神の真理に心を委ねることです。それは、自らの罪を認

め、神の憐れみを受け入れ、私たちにはできない働きを神に委ねることなのです。かつて釘付けにされたその御手は、今もなお同じ招きをもって差し伸べられています。

「来なさい。」あなたは、来ますか？

「東が西から遠いように、主はわれらのとがをわれらから遠ざけられる。」

詩篇 103:12

3 月 11 日

聖書箇所: ルカによる福音書 9:23-24

「それから、みんなの者に言われた、『だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのために自分の命を失う者は、それを救うであろう。』」

キリストが人々を招かれるとき、それは「来て、死になさい」という招きです。弟子としての歩みは、単なる宗教的な感傷や自己改善への道ではなく、キリストにすべてを委ねるという召しなのです。そこに中途半端な姿勢や妥協の余地はありません。イエスに従うということは、自分自身の安全や確実さを捨て、完全に主に身を委ねることなのです。「自己を捨てなさい。」この世界は「自己実現」を説きますが、イエスは「自己否定」を命じられます。弟子は自らの条件を決めるのではなく、人生のすべてをキリストの主権のもとに置きます。

彼は「何が得られるのか？」ではなく、「何を捧げるべきか？」と問うのです。

この自己否定は、自分自身の個性や存在を否定することではありません。むしろ、自らの意志を完全に神に委ねるという、全き降伏の行為なのです。

「日々、自分の十字架を背負いなさい。」

十字架は飾りではなく、「死」の宣言です。それは自分の栄光のために担うものではなく、キリストと共に自らが十字架につけられることを意味します。

十字架を背負うとは、一時的な決断ではなく、生き方そのものなのです。弟子は主に従いますが、それは安楽な道ではなく、苦しみ、拒絶、さらには必要であれば死に至る道なのです。

「自分の命を救おうとする者は、それを失い…」快適さ、地位、自己保身にしがみつく者は、結局、守ろうとしたものをすでに失っているのです。しかし、キリストのためにすべてを手放す者は、真の命を見出します。それは、永遠に続き、豊かで、真に自由な命です。これこそ、神の国の大いなる逆説です。自分を失うとき、私たちは本当の自分を見

出します。死ぬとき、私たちは真に生きるのです。

世はそのような生き方を嘲るでしょう。それを愚かだと呼ぶかもしれません。しかし、弟子は世の評価を求めるのではありません。

「十字架は、敬虔で幸福な人生の悲惨な終わりではなく、むしろキリストとの交わりの始まりに私たちを迎えるものなのです。」

— ディートリヒ・ボンヘッファー

3 月 12 日

聖書箇所: ヨハネによる福音書 8:12

イエスは、また人々に語ってこう言われた、「わたしは世の光である。わたしに従って来る者は、やみのうちを歩くことがなく、命の光をもつであろう」。

この世界は暗闇に満ちています。霊的な盲目、混乱、そして絶望が広がっています。人々は人生の中で真理を求めても、見つけるのは影ばかりです。そのような暗闇の中に、イエスは語られます。「わたしは世の光です。」イエスはただ光をもたらすのではなく、ご自身が光なのです。多くの導き手の一人ではなく、罪に迷った世界において唯一の真の光なのです。

キリストに従うということは、影の中から踏み出すことです。中立の立場は存在しません。ある人々は闇を愛し、自分のやり方の心地よさを優先してイエスを拒みます。一方で、光を見て従う人々もいます。彼らは罪と自己中心の支配を捨て去ります。

光は隠れたものを暴き、光は変革をもたらします。キリストの存在は単なる選択肢ではなく、すべてを変える現実なのです。イエスの光の中を歩むということは、自分の知恵、自分の義、自分のやり方を手放すことです。それは、目が覚めた者として生き、世界をありのままに見つめ、その真理の確かさに基づいて前進することなのです。

「わたしに従う者は、決して闇の中を歩むことがない。」これは約束であり、同時に命令でもあります。キリストは、遠くから光を眺めるようにとは呼ばれません。従うことに招いておられるのです。すなわち、信頼して一歩踏み出し、完全にイエスに信頼し、その御臨在の輝きの中に生きることです。

引用:

「私はキリスト教を信じています。それは、太陽が昇ったと信じるのと同じです。ただ太陽を見るからではなく、その光によって他のすべてを見ることができるからです。

— C.S.ルイス

3 月 13 日

聖書箇所: ペトロの手紙一 2:21

「あなたがたは、実に、そうするようにと召されたのである。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、御足の跡を踏み従うようにと、模範を残されたのである。」

キリストに従う召しは、楽なものではなく耐え抜くものです。ペトロは苦しみが来るかもしれないとは言わず、それが私たちの召しだと言います。これは、単に苦しむこと自体が目的ではなく、意味のない痛みでもありません。それは、キリストご自身が歩まれた道であり、私たちもその足跡に従うようにと召されているのです。

キリストの苦しみは偶然ではなく、目的のあるものでした。彼は侮辱されても報復せず、不当な扱いを受けても不満を言わず、完全に御父の御心に従われました。ご自分の権利を主張するのではなく、公正に裁かれるお方にご自身を委ねられたのです。こうして、キリストは私たちに模範を残されました。それは、単に称賛するためではなく、実際に倣うべき模範なのです。

「その足跡に従うように。」弟子の道は自分で作るものではなく、すでにキリストの足跡によって示されています。キリストは、苦しみにどう応えるべきかを教えてくださいました。忍耐と謙遜、そして揺るがぬ信仰をもって。十字架の道は、キリスト者にとって選択肢ではなく、必ず歩むべき道なのです。

これが弟子としての代価です。私たちは苦しみを求めるわけではありませんが、それが訪れたときには、恐れて後退するのではなく、キリストがそうされたように耐え忍びます。私たちの苦しみの中で、神は私たちをキリストの姿へと造り変えておられるのです。

このメッセージに、世は反発します。自己放棄ではなく、自己防衛を勧めます。しかし、キリストに従う者は失うことを恐れません。なぜなら、キリストの苦しみにあずかる者は、やがてキリストの栄光にもあずかると知っているからです。

「もしあなたが正しいことをしたために苦しむなら、あなたは預言者や聖人、そしてキリストご自身の歩んだ道を歩んでいるのです。」

―ディートリヒ・ボンヘッファー

3 月 14 日

聖書箇所: イザヤ書 55:6-7

「あなたがたは主にお会いすることのできるうちに、主を尋ねよ。近くおられるうちに呼び求めよ。悪しき者はその道を捨て、正しからぬ人はその思いを捨てて、主に帰れ。そうすれば、主は彼にあわれみを施される。われわれの神に帰れ、主は豊かにゆるしを与えられる。」

この静かな瞬間に、主は私たちを彼の臨在に近づくよう招かれます。日々の慌ただしさや生活の騒音と要求に気を取られがちですが、イザヤ書の中で、神が近くにおられ、彼のあわれみが求めれば受けられること、彼の恵みが受け取れることを思い出させられます。

「主を求めよ、見つけられる間に。」これはただ探すことを意味するのではなく、立ち止まり、聞き、そして主の近さに安らぐことへの招きです。神は常に私たちを自分の元に招いておられますが、私たちが意図的に応答することが求められます。求める時があり、心を完全に神に向ける時があります。そしてその時は今です。

「悪しき者はその道を、不義な者はその思いを捨てなさい。」これは悔い改めの呼びかけであり、神から遠ざけるパターンを離れることです。行動を変えるだけではなく、心と精神の方向を転換することです。神は外面的な行動だけでなく、私たちの心を望んでおられます。

そして、美しい約束が続きます。「彼は彼らを憐れみ、自由に赦す。」どんなに遠くへ行ってしまっても、どれほど何度も迷い続けても、主は常に赦し、回復させ、私たちを迎え入れてくださいます。神の憐れみは、私たちの努力によって得られるものではなく、無償で、条件なく与えられる贈り物です。

今日、私たちが主を求めるとき、神の憐れみが私たちを待っていることを思い出しましょう。恐れることも、ためらうこともありません。神は近くにおられ、私たちにその恵みを注ぐ準備が整っています。

「神を求める心は、必ず神を見つける心である。なぜなら、神はすでに近くにおられるから。」

— アンリ・ヌーウェン

3 月 15 日

聖書箇所: マタイによる福音書 6:16-18

「また断食をする時には、偽善者がするように、陰気な顔つきをするな。彼らは断食をしていることを人に見せようとして、自分の顔を見苦しくするのである。よく言っておくが、彼らはその報いを受けてしまっている。あなたがたは断食をする時には、自分の頭に油を塗り、顔を洗いなさい。それは断食をしていることが人に知れないで、隠れた所においでになるあなたの父に知られるためである。すると、隠れた事を見ておられるあなたの父は、報いて下さるであろう。」

私たちの霊的な生活には、祈り、断食、施しなど、神との関係を深めるための実践があります。特に断食は誤解されたり、誤用されたりしがちです。この箇所で、イエスは断食の本当の目的と心を教えてくださいます。

断食は他人に正しいと見せるためのものではありません。イエスの時代、偽善者たちは断食していることを皆に知らしめ、人々の称賛を求めました。しかし、イエスは別の道、隠れた道を呼びかけます。断食は私と神との間だけで行うもの。犠牲を顔や行動に表してはいけません。むしろ、静かな謙遜さで主とその意志を求め、他人がどう思うかを気にせずに、主とその御心を求めるべきです。

「しかし、あなたが断食をする時は、頭に油を塗り、顔を洗いなさい。」イエスの指示はシンプルでありながら深い意味があります。私たちは日常を普通に過ごし、私たちの犠牲に注目を集めないようにしなければなりません。焦点は外見にではなく、私たちの心の内面の姿勢にあります。秘密の中で見てくださる父が報いてくださいます—他の人からの賞賛ではなく、神とのより深い親密さと、地上のどんな認識よりもはるかに大きな霊的な報いで私たちを祝福してくださいます。

本当の断食は、私たちの行いを見せることによってではなく、秘密の中で神の前に謙遜に立つことによって、私たちを神に近づけます。

「断食とは、神の御顔を求めることから私たちをそらすものを全て控えることです。」

— リチャード・フォスター

40 DAYS OF DEPTH

第3週

隠された深み

3月17日 – 3月22日

KOBE UNION CHURCH

第 3 週: 隠された深み (Hidden Depths)

3 月 17 日

聖書箇所: ローマの信徒への手紙 12:1-2

「兄弟たちよ。そういうわけで、神のあわれみによってあなたがたに勧める。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物としてささげなさい。それが、あなたがたのなすべき霊的な礼拝である。あなたがたは、この世と妥協してはならない。むしろ、心を新たにすることによって、造りかえられ、何が神の御旨であるか、何が善であって、神に喜ばれ、かつ全きことであるかを、わきまえ知るべきである。」

これらの力強い 2 つの聖句の中で、パウロは私たちに徹底した献身と変革の人生へと招いています。その招きは明確です。私たちは、自分の行動や外見だけでなく、自分の存在そのものを生けるささげものとして神にささげるようにと呼ばれています。旧約聖書では、ささげものは神への献げ物であり、しばしば価値あるものを手放すことが伴いました。しかし、パウロはこの概念を一変させました。死んださささげものではなく、「生けるささげもの」になるようにと私たちに求めているのです。これは一度きりの行為ではなく、私たちの人生、選択、心を絶えず神にささげることです。「神のあわれみを思って」。私たちが神に応答するのは、義務や恐れからではなく、神の恵みとあわれみを深く理解した結果なのです。神は私たちにすべてを与えてくださいました。御子、赦し、愛、これらすべてを与えられた私たちは、その感謝の応答として自らを神にささげるのです。これこそが、私たちの真の礼拝であり、単なる儀式や外面的な行動ではなく、神への完全な降服を意味しています。

しかし、このささげものには目的があります。次に「心の一新によって変えられなさい」と勧めています。変革は、自らを神にささげることの実なのです。私たちはもはや、この世の価値観や欲望、そのやり方に形作られるのではありません。むしろ、神に降服することで、神は私たちの心を新たにし、私たちの願いを正し、私たちの心を神の御心に一致させてくださるのです。

この変革の結果は明確です。「そうすれば、あなたがたは、神のみこころが何であるか、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかを見分けることができるようになります。」

「世はそのまま受け入れるものではなく、神の力によって変えられるものです。」

ディートリヒ・ボンヘッファー

3 月 18 日

聖書箇所: エペソの信徒への手紙 2:8-9

「あなたがたの救われたのは、実に、恵みにより、信仰によるのである。それは、あなたがた自身から出たものではなく、神の賜物である。決して行いによるのではない。それは、だれも誇ることがないためなのである。」

これらの聖句の中で、私たちはキリスト教徒の人生において最も基本的な真理に直面します。それは、救いが完全に神の御業であるということです。救いは私たちの努力の結果ではなく、私たちが誇ることができるものでもありません。救いは、神の恵みによって与えられる、神からの賜物—無償であり、受けるに値しない贈り物なのです。

一旦立ち止まり、この意味を考えてみましょう。恵みは、自分の努力で生み出したり、引き起こしたりできるものではありません。それは私たちの働きではなく、神の御業なのです。もし私たちが恵みに何かを加えられると考えるなら、それは恵みの本質そのものを誤解していることになります。私たちは、救いが完全に無償の贈り物であり、それを得たり、失ったりすることも自分たちの意思では管理できないという事実を受け入れなければなりません。

「あなたがたは、恵みにより、信仰によって救われたのです。」ここでは、恵みと信仰は切り離せないものとして描かれています。恵みは私たちを救う神の力であり、信仰はそれを受け取る手段です。信仰は私たちの働きではなく、単に神の招きに対する応答なのです。

忘れてはならないのは、救いは一度きりの出来事ではないということです。信仰者の人生とは、恵みを絶えず受け取り続ける人生なのです。毎日、私たちは神から受け取ることを学び、神が必要なすべてを備えてくださると信じ、歩む一歩一歩において神に頼ることが求められます。これこそがクリスチャンの生き方です。それは自己努力の人生ではなく、神の恵みに依存する人生なのです。

救いは過去の出来事だけでなく、この瞬間も現実であることを忘れないでください。私たちは、自分の行いではなく、キリストの御業によって恵みにより

救われた者として、毎日を生きなければ
ならないのです。

「恵みは神の最も豊かな宝であり、最もふさわしくない者に与えられます。恵みを受け取るには、自我に満ち、自分中心になっている心を空にしなければなりません。」

— ウォッチマン・ニー

3 月 19 日

聖書箇所: ヘブライ人への手紙 4:15-16

「この大祭司は、わたしたちの弱さを思いやることのできないようなかたではない。罪は犯されなかったが、すべてのことについて、わたしたちと同じように試錬に会われたのである。だから、わたしたちは、あわれみを受け、また、恵みにあずかって時機を得た助けを受けるために、はばかることなく恵みの御座に近づこうではないか。」

これらの聖句の中で、ヘブライ人への手紙の著者はキリストの大祭司としての麗しさと力を明らかにしています。イエスは、私たちの苦しみから遠く離れ、無関心な方ではありません。むしろ、私たちの弱さを深く理解しておられるお方です。イエスは、私たちが直面する誘惑、背負っている重荷、そして私たちを圧倒しようとする試練をよくご存じです。イエスは、遠くから無関心に見守るような大祭司ではなく、人間としての経験を共有し、誘惑され、試され、弱さを感じるとはどういうことかを完全に理解しておられるのです。それでもなお、イエスは罪を犯されませんでした。

これは私たちにとって深い慰めです。イエスは単に遠くから同情されたのではなく、私たちの経験の中に入り込み、人間の苦しみの重みをすべて背負われました。それは、イエスが私たちを神の前に真にとりなすことができるためでした。イエスの共感は、受け身的なものではなく、能動的で、力強く、そして贖いの力に満ちています。旧約時代の大祭司は、人間の経験の深さを完全には理解できませんでしたが、罪のない神の御子であるイエスは、完全な仲介者なのです。

「自信をもって恵みの御座に近づきましょう。」これはクリスチャン信仰の最も驚くべき側面の一つです。私たちは恐れや躊躇いをもって神に近づくのではなく、大胆に近づくよう招かれています。私たちが近づく御座は裁きの御座ではなく、恵みの御座です。私たちは弱さの中で神に近づくよう招かれ、そこで非難ではなく憐れみ、拒絶ではなく恵みを見いだすと確信しています。

どんなに心が壊れていても、どんなに大きな必要があっても、神の御座か

ら遠ざかることはありません。キリストによって、私たちの願いは憐れみで迎えられ、心は恵みで満たされると保証されています。これが福音の本質です。私たちは自分の価値に基づいてではなく、憐れみ深い大祭司であるイエス・キリストの功績により、神の御前に近づくのです。

「私たちが神に最も満足しているとき、神は私たちを通して最も栄光を現されます。」

ージョン・パイパー

3 月 20 日

聖書箇所: 詩篇 103:8-12

「主はあわれみに富み、めぐみふかく、怒ること遅く、いつくしみ豊かでいらせられる。主は常に責めることをせず、また、とこしえに怒りをいだかれない。主はわれらの罪にしたがってわれらをあしらわず、われらの不義にしたがって報いられない。天が地よりも高いように、主がおのれを恐れる者に賜わるいつくしみは大きい、 東が西から遠いように、主はわれらのとがをわれらから遠ざけられる。」

神のあわれみは、信仰者の人生において壮大な現実として存在しています。それは、私たちの失敗にもかかわらず、再び神のもとへと引き寄せる、受けるに値しない圧倒的な優しさです。詩篇 103 篇で、ダビデは神のあわれみの広さを宣言しています。それは気まぐれで一時的なものではなく、不変で永遠に続くものであり、私たちの在り方ではなく、神ご自身の本質に基づくものです。

「主は、あわれみ深く情け深い。怒るのに遅く、恵みに富んでおられる。」これらは、神がわずかに持っている性質ではなく、神の存在からあふれ出し、神のすべての行いを形作る特質です。驚くべきことに、神はすぐに非難されるお方ではなく、怒りにすぐ燃え上がるお方でもありません。たとえ私たちが罪を犯したときでさえ、神が最初に示されるのはあわれみです。私たちの最も深い失敗に直面したとしても、神の愛はそれをはるかに超えて、豊かにあふれているのです。

詩篇は続けて言います。「天が地の上に高いように、主を恐れる者に対する主の愛は大きい。東が西から遠く離れているように、主は私たちの背きの罪を遠くに投げ捨てられた。」この描写は、美しく、また謙遜を促すものです。神の愛は私たちが経験する地上の状況に制限されることはありません。それは無限で、限界なく、測ることができないものです。私たちの罪が取り除かれること、東と西の間の距離のように、これは力強いイメージです。神が私たちと私たちの罪の間に置かれた距離ほど大きな距離はなく、深い隔たりはありません。神は私たちを赦しただけでなく、私たちの罪を

完全に記憶から消し去ってくださったのです。

私たち人間の経験では、過去の過ちを思い出すことがあります。自分自身の過ちも含めて。しかし、神はそのあわれみによって、それらを投げ捨て、もはや思い出すことはありません。これこそが神の恵みの深さです。神は赦したことを忘れることを選ばれたのです。私たちが悔い改めて神のもとに戻るとき、神は過去の罪を掘り起こすことはなく、永遠の愛と恵みの視点で私たちを見てくださいます。

私たちは自問しなければなりません：私たちは神のあわれみの広さを理解しているのでしょうか？

「神の恵みはそれにふさわしい者に与えられるのではなく、それを必要としていることを理解している者に与えられる。」

ー オズワルド・チェンバース

3 月 21 日

聖書箇所: ローマの信徒への 8:1-2

「こういうわけで、今やキリスト・イエスにある者は罪に定められることがない。なぜなら、キリスト・イエスにあるいのちの御霊の法則は、罪と死との法則からあなたを解放したからである。」

ローマ人への手紙 8 章 1-2 節の深遠な宣言の中で、私たちはキリスト教信仰の最も解放的な真実の一つに出会います。「キリスト・イエスにある者には今や、罪に定められることはありません。」これは条件付きの言葉でもなく、可能性でもなく、現実です。キリストにある者にとって、罪のために受けるべき罰や罪の重荷は永遠に取り除かれました。かつて私たちの上に暗雲のように覆っていた定めは取り去られ、私たちは自由に立っています。しかし、この真実の深さを少し立ち止まって考えてみましょう。

キリストにあるということは、私たちの罪の罰がイエスにかかっていることを意味します。十字架での彼の犠牲、完璧な従順が私たちの義となりました。これは単なる赦しではなく、変革です。かつて私たちを支配していた罪と死の法則は、命を与える霊の法則に取って代わられました。聖霊を通して、私たちは新しい領域、すなわち自由の領域に入れられました。そこでは、私たちはもはや私たちを奴隷にしていた古い力に縛られることはありません。

かつて罪と死の法則は私たちを支配していました。それは私たちの行いを決定し、私たちを罪の結果に束縛していました。しかし、キリストにおいて、その法則は無力にされました。私たちを非難した法則は、霊の法則に取って代わられました。霊は命を与え、私たちにキリストが確保した自由の中で生きる力を与える方です。私たちは自分の努力に頼るのではなく、今や聖霊の命を与える力に参加し、罪と死に対して勝利を収めることができるようになったのです。

しかし、「キリストにある」ということが意味する重要性を忘れてはいけません。ローマ人への手紙 8 章 1-2 節の真実をただ認めるだけでは十分ではあり

ません。私たちは絶えずキリストにとどまり、彼の成し遂げた働きに安らぎ、彼が与えてくださる自由の中で歩まなければなりません。この自由は、私たちが自分の好きなように生きることを求めているのではなく、私たちを聖さと義に導く霊の力によって生きることを求めています。自由への招きは、新しい命への招きでもあります。それは霊によって力を与えられ、キリストの愛によって特徴づけられる命です。

「キリストは律法の終わりであり、それは律法が廃止されたからではなく、キリストがそれを成就したからです。」

— ジョン・ストット

3 月 22 日

聖書箇所: ヨハネの手紙１ 1:9

「もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる。」

ヨハネの手紙１1:9 の美しい簡潔さの中に、聖書の中で最も慰められる約束の一つが見つかります。**もし私たちが自分の罪を告白するなら**、神は私たちを赦してくださるというものです。この節には複雑な条件や難解な式はありません。ただ、神の前に正直に謙遜に出るというシンプルな招きがあるだけです。これは、神が忠実であり正しいお方であり、常に赦し、清めてくださる心を示しています。

告白の行為は単に誤りを認めることではなく、神の恵みを必要としていることを認識することです。それは、自分自身を清めることができないこと、神のあわれみなしには無力であることを認めることです。聖書が教えるように、罪は単なる行動の積み重ねではなく、神との分離の状態です。それは私たちと創造者との関係を乱しますが、神は限りない恵みによって和解を提供してくださいます。私たちが告白する時、私たちは神に罪を告げるのではなく、私たちの壊れた状態について神と同意し、神の愛に向かって立ち返っているのです。

神は私たちを赦すだけでなく、**すべての不義から清めてくださいます。**神は私たちを徹底的に、完全に清め、何の汚れも残しません。これは表面的な清めではなく、私たちを神との正しい関係に回復させる深く、変革的な浄化です。告白を通して、私たちは赦しと更新の両方を経験します—新たな始まり、神の恵みの光の中を歩む新しい機会です。この約束が一度きりの罪に対してだけでなく、継続的な失敗に対しても与えられていることを覚えておくことが重要です。私たちは失敗したときに神から遠ざかる必要はありません。告白の過程は、私たちを打ち負かすためでも、私たちの不十分さを思い出させるためでもなく、私たちが最も必要とするその瞬間に、神が私たちを神ご自身に近づける方法なのです。

「キリスト教の生涯は、罪の不在ではなく、罪を意識し、それを告白する意欲です。」

— ビリー・グラハム

40 DAYS OF DEPTH

第4週

打ち寄せる波

3月24日 – 3月29日

KOBE UNION CHURCH

第 4 週: 打ち寄せる波 (Crashing Waves)

3 月 24 日

聖書箇所: テトスへの手紙 3:4-7

「ところが、わたしたちの救主なる神の慈悲と博愛とが現れたとき、わたしたちの行った義のわざによってではなく、ただ神のあわれみによって、再生の洗いを受け、聖霊により新たにされて、わたしたちは救われたのである。この聖霊は、わたしたちの救主イエス・キリストをとおして、わたしたちの上に豊かに注がれた。これは、わたしたちが、キリストの恵みによって義とされ、永遠のいのちを望むことによって、御国をつぐ者となるためである。」

テトスへの手紙 の中で、神の計り知れない憐れみについて思い起こさせられます。それは私たちの理解を超えた憐れみであり、私たちの行いによるものではなく、私たちの善さや功績に基づくのではなく、ただ神の恵みと愛によるものです。「わたしたちの行った義のわざによってではなく、ただ神のあわれみによって。」ご自身の変わることのない本質に従って私たちに働かれます。神は慈しみ深く、愛に満ち、憐れみ深いお方なのです。

この世はしばしば「自分の行いに応じた報いを受ける」という原則で動いていますが、神のやり方はそれとは根本的に異なります。神は、私たちがそれに値するからではなく、ご自身が善であり、憐れみに満ちておられるがゆえに与えてくださるのです。私たちの救い主である神の慈しみと愛は、イエス・キリストというお方を通して現されました。そして、そのご顕現によって、私たちは救われたのです。私たちが経験する救いは、私たちの行いによるのではなく、まさに神の憐れみと恵みの結果なのです。私たちの救い主であるイエス・キリストを通して、この豊かな恵みは惜しみなく私たちに注がれています。無償で与えられた聖霊の賜物は、私たちの未来の希望—すなわち永遠のいのち—の確かな保証です。この希望は単なる漠然とした願いではなく、キリストの完成された御業と、永遠のいのちの約束に基づいた確信なのです。

この聖句は、神の憐れみの深い豊かさについて思い巡らすよう私たちを招いています。それは私たちが得るものではなく、無償で与えられるもの、限りあるものではなく、満ち溢れるものです。永遠のいのちを受け継ぐ者として、私たちは神の憐れみに生きるよう招かれています。御霊によって与えられた新しいいのちを喜び、私たちを待ち受ける栄光の希望にあって歓喜するのです。

「恵みとは、神の自由で、値しない善良さと好意です。」

— ビリー・グラハム

3 月 25 日

聖書箇所: ヨハネによる福音書 3:16

「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。」

ヨハネ 3:16 は福音の中心であり、神の愛の深さと彼が世に提供する深い贈り物を要約する節です。この言葉に、神の愛の本質が見えます。それは限られたものでも自己中心的なものでもありません。「神は世を愛して...」これは、国境、文化、時を超えて広がる愛です。失われた者、傷ついた者、そしてそれに値しない者をも追い求める、全世界への愛なのです。

神の愛の大きさは曖昧な愛情ではなく、具体的で犠牲的な行為に示されます。彼は言葉で愛を表現するだけでなく、ひとり子を与えてくださいました。イエスの贈り物は愛の究極の現れであり、すべてを犠牲にする愛です。父によって遣わされたイエスは肉体をとり、私たちの壊れた世界に入り、私たちの罪の重荷を負われました。十字架での彼の犠牲は私たちの救いの代価であり、彼の死と復活によって、信じるすべての者に永遠の命への道が開かれました。

この聖句は、信じることへの招きでもあります—すなわち、イエス・キリストの御業に信頼することです。「御子を信じる者は、滅びることなく、永遠のいのちを持つ」ここで言われている「信じる」とは、単なる知的な同意ではなく、イエスが誰であり、何を成し遂げられたのかに対する深く、人生を変えるような信頼を意味しています。

永遠のいのちの約束は、単に「長さ」だけのものではなく、「質」の問題でもあります。永遠のいのちは、ただ終わりなく生きることではなく、神の御前で生き、永遠にその愛と恵みを味わうことです。それは、創造主との関係の中で生きるいのちであり、この世の何ものも与えることのできない喜び、平安、そして満たしに満ちたものです。永遠のいのちは、私たちが信じた瞬間に始まり、未来の希望であるだけでなく、今この瞬間から現実として続いていくのです。

この聖句を思い巡らすとき、私たちは神の愛の計り知れない豊かさに驚嘆せずにはいられません。それは、与える愛、犠牲を払う愛、そして私たちを新しい生き方へと招く愛です。そしてそれは、私たちの行いによるのではなく、イエス・キリストを通しての神の恵みによって、永遠のいのちを約束する愛なのです。

「神の愛は、私たちの行いに基づくのではなく、神ご自身の本質に基づいています。」

— マックス・ルケード

3 月 26 日

聖書箇所: ピリピ信徒への手紙 2:5-8

「キリスト・イエスにあっていだいているのと同じ思いを、あなたがたの間でも互に生かしなさい。キリストは、神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事とは思わず、かえって、おのれをむなしうして僕のかたちをとり、人間の姿になられた。その有様は人と異ならず、おのれを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた。」

ピリピ信徒への手紙 2:5-8 はキリストのへりくだりについての深い真理を示しています。パウロは私たちにイエスの心構えを持つよう呼びかけます。その謙遜と従順がすべての信者の模範となりました。この箇所で最も際立つ真理の一つは、イエスが本来神の本質を持っておられたにもかかわらず、その神としての特権に固執しなかったことです。受肉において、イエスは神と等しいことを自分の利益のために用いるべきものとは考えず、むしろご自身の栄光を置いてこられました。イエスのへりくだりは、単なる態度ではなく、意識的な選択であり、人となって私たちの間に生きるという能動的な決断だったのです。

これがクリスチャンの謙遜の本質です。自分を低く見ることではなく、自分を少なく考えることです。C.S.ルイスがかつて言ったように、それは自己卑下ではなく、権利、快適さ、欲望を他者のために明け渡す意志です。イエスの謙遜は弱さからではなく、彼が誰であり、来た目的を知る強さから生まれました。

イエスはしもべの姿を取ることによって、真の偉大さは地位ではなく、仕えることにあることを示されました。彼は単に人間として現れたのではなく、しもべとして来られました。彼は、社会の疎外された人々、貧しい人々、そして疎まれた人々の中で生き、彼が説いたしもべのような愛を体現されました。イエスの地上でのすべての働きは、仕えることによって特徴づけられています。弟子たちの足を洗うことから、最終的に世界の救いのために命を捧げることに至るまで、すべてが仕える姿勢で満たされていました。

キリストの弟子として、私たちはその謙遜を模倣するように呼ばれています。それは単なる表面的な仕草ではなく、私たちの心の奥深くからのことです。私たちは、神と他者に仕えるために、私たちの特権や地位、欲望を捧げるように呼ばれています。十字架は、私たちが外面的にだけでなく内面的にも自己を捧げることを挑戦します。他者の必要を自分自身の上に置き、福音のために自分の時間、資源、そして時には名声さえも犠牲にするように求められています。

「クリスチャンとは、ただ仕える者ではなく、すべてを犠牲にしてでも仕えることをいとわない者です。」

— ディートリヒ・ボンヘッファー

3 月 27 日

聖書箇所: ピリピ信徒への手紙 2:5-8

「キリスト・イエスにあっていだいているのと同じ思いを、あなたがたの間でも互に生かしなさい。キリストは、神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事とは思わず、かえって、おのれをむなしうして僕のかたちをとり、人間の姿になられた。その有様は人と異ならず、おのれを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた。」

今日の世で、謙遜はしばしば誤解されます。弱さや自己否定と考えられますが、キリストの謙遜は力、愛、自己犠牲を表しています。ピリピ信徒への手紙 2:5-8 はイエスが私たちのために示された謙遜のあり方を力強く描いています。イエスは自分の神としての権利や特権に固執することはありませんでした。むしろ、自己を空にし、しもべの姿を取られました。これによって、真の偉大さは他者に仕えることにあり、仕えられることではないことを示されたのです。

イエスの謙遜は行動だけでなく心についてでした。彼は栄光に留まることを選べましたが、私たちの世界に、その闘い、痛み、不完全さと共に入ることを選びました。彼は神聖な地位を握り潰すこともできましたが、私たちのためにすべてを放棄しました。これが神の根本的な愛—無条件で、自己を犠牲にし、捧げる愛です。

キリストの従者として、私たちは自分の人生において同じ心構えをとるよう招かれています。欲望や野心を脇に置き、他者に仕えるよう求められています。

イエスが十字架を忍ぶ意志を思い巡らすとき、謙遜にはしばしば代償が伴うことを思い出させられます。謙遜は決して簡単なものではありません—それは私たちの誇りや認識される必要性、そして時には自分自身の快適さを捨てることを意味します。しかし、そのようにすることで、私たちは神の愛と恵みをより深く体験することができます。十字架はイエスの謙遜の究極の象徴であり、同時に私たちへの彼の愛の究極の象徴でもあり

ます。彼の犠牲を通して、私たちは癒され、赦され、回復するのです。

この季節に、イエスが示した同じ謙遜を持って生きるよう励まされましょう。他者に仕え、権利を放棄し、見返りを期待せずに愛すること。そして、謙遜の中で、私たちのために謙遜になられたお方に似る者となることを覚えましょう。

「謙遜とは自分を低く考えることではなく、自分を少なく考えることです。」

— C.S.ルイス

3 月 28 日

聖書箇所: イザヤ書 53:3-5

「彼は侮られて人に捨てられ、悲しみの人で、病を知っていた。また顔をおおって忌みきらわれる者のように、彼は侮られた。われわれも彼を尊ばなかった。まことに彼はわれわれの病を負い、われわれの悲しみをになった。しかるに、われわれは思った、彼は打たれ、神にたたかれ、苦しめられたのだと。しかし彼はわれわれのとがのために傷つけられ、われわれの不義のために砕かれたのだ。彼はみずから懲らしめをうけて、われわれに平安を与え、その打たれた傷によって、われわれはいやされたのだ。」

イザヤ書 53:3-5 は、イエスの犠牲の深さと私たちの救いの代償を強く思い起こさせる箇所です。これらの節は、私たちのために拒絶され、痛み、そして途方もない苦しみを耐え忍んだしもべの姿を描いています。キリストが軽んじられ、拒絶されたという表現は、彼が経験した孤独と苦悶、肉体的・感情的な痛みを表しています。彼は世界から拒絶されただけでなく、その目的も誤解されました。彼がすべてを耐え忍んだにもかかわらず、自己を復讐するために来たのではなく、世界の罪の重荷を背負うために来られたのです。

この節では、世がイエスをどう見ていたかと彼の犠牲の現実との間に鮮やかな対比が見られます。人々は彼が自身の罪のために神に打たれたと信じましたが、実際は他者の罪のために苦しんでいました。彼は私たちが受けるべき懲らしめを負い、私たちの背きがふさわしい痛み、苦しみ、神との分離を担いました。それでも、彼の苦しみには癒しがあります。彼に下った懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の傷によって私たちは癒されるのです。

これが福音の美しさです。彼の苦しみの中で私たちは平安を見いだし、彼の傷の中で癒しを得ます。彼が耐えた痛みは無駄ではなく、私たちの贖い、罪の赦し、神との関係の回復のためでした。イエスの十字架の死は単なる歴史的事件ではなく、人類史の転換点、神が私たちを彼と和解させる道を開いた瞬間です。

「十字架は、私たちの最も深い悲しみが神の最大の愛に出会う場所です。」

— マックス・ルケード

3 月 29 日

聖書箇所: ガラテヤ信徒への手紙 2:20

「わたしはキリストと共に十字架につけられた。生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである。しかし、わたしがいま肉にあって生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神の御子を信じる信仰によって、生きているのである。」

ガラテヤ信徒への手紙 2:20 で、使徒パウロはクリスチャン生活の深い神秘—キリストとの一致—を要約します。「キリストと共に十字架につけられた」とは、単なる神学的な概念ではなく、根本的な生き方です。パウロはすべての信者に深い現実を表現しています。罪と反逆で特徴づけられた古い自己が十字架につけられたのです。私たちはもはや自分のために生きるのではなく、彼の霊の力によって私たちの内に生きておられるキリストのために生きるのです。

この節は、福音の光の中で自分の人生をどう見るかを再考するよう伝えています。キリストと共に十字架につけられたなら、古い欲望、利己的な野心、罪、誇りはもはや私たちを支配しません。

神の子の信仰によって生きるとはどういう意味でしょうか。それは、私たちの人生がもはや自分の力や意志で動かされるのではなく、イエス、彼の愛、彼の犠牲、彼の力に置く信仰によって動かされるということです。私たちを愛し、私のためにご自身を捧げられたキリストが今、私たちの内に生き、私たちが召された命を生きる力を与えてくださいます。私たちはもはや過去の過ちや失敗によって定義されず、彼にあって新しい命によって定義されます。

この真理を心に留めて生きるとき、私たちは自己承認の果てしない追求から解放され、代わりにもっと大きな目的...神の栄光のために生きるように呼ばれています。私たちの生き方は、神の愛と恵みの反映であり、すべての行動、すべての決断、すべての思いは、私たちの中に生きておられるキリストを中心に据えるべきです。

これは自分の力で努力する人生ではなく、私たちを愛し、ご自身を捧げられたお方の力に憩う人生です。そして、彼への信仰によって生きるとき、彼は日々私たちを変えて、彼自身に似た者としてくださいます。

「もはや私が生きているのではなく、キリストが私の内に生きておられる。今、私が生きている命は、復活された主イエスが信者の中に生きる命です。これがクリスチャンの最高の特権です。」

— オズワルド・チェンバース

40 DAYS OF DEPTH

第5週

安定した流れ

3月31日 – 4月5日

KOBE UNION CHURCH

第 5 週: 安定した流れ (Steady Currents)
3 月 31 日

聖書箇所: イザヤ書 53:3-5

「彼は侮られて人に捨てられ、悲しみの人で、病を知っていた。また顔をおおって忌みきらわれる者のように、彼は侮られた。われわれも彼を尊ばなかった。まことに彼はわれわれの病を負い、われわれの悲しみをになった。しかるに、われわれは思った、彼は打たれ、神にたたかれ、苦しめられたのだと。しかし彼はわれわれのとがのために傷つけられ、われわれの不義のために砕かれたのだ。彼はみずから懲らしめをうけて、われわれに平安を与え、その打たれた傷によって、われわれはいやされたのだ。」

イザヤ書 53 章のこれらの節は、救世主イエス・キリストの深い苦しみと、私たちの救いの途方もない代価を明らかにしています。彼は肉体的に拷問されただけでなく、私たちの罪の重荷を負う者として感情的にも霊的にも砕かれました。「軽蔑され」「拒まれた」という表現は、彼が耐えた孤立と嘲笑を示しています。イエスはその苦しみの中で、人類の最も深い痛みに共感し、壊れた者、拒絶された者、軽んじられた者すべてにとって完璧な救い主となられました。

イイエスの死は、ただの良い生涯の不運な終わりではありませんでした。それは私たちの罪のために必要な犠牲でした。彼は私たちの罪のために突き刺され、私たちの不義のために打ち砕かれ、私たちが受けるべき罰はすべて彼に負わされました。その犠牲の結果として、私たちには平和が与えられます。それは、この世の一時的で儚い平和ではなく、神との永遠に続く平和です。

これを踏まえて、キリストの偉大な愛と、私たちのためにそのような苦しみを耐える彼の意志を振り返るよう招かれます。彼が提供する平安をどれほど当たり前と考え、その代価を考えないことが多いでしょうか。この箇所は、キリストの犠牲の重さと、彼の贖いの働きによって今私たちが享受している平和について、より深く理解するように私たちに呼びかけています。

「キリストの傷は偶然の結果ではなく、神の愛と贖いの意図的な計画によるものです。」

— ジョン・ストット

4月1日

聖書箇所: ヨハネの手紙一 4:9-10

「これが神が私たちに愛を示した方法です：神はそのひとり子を世につかわし、彼によってわたしたちを生きるようにして下さった。それによって、わたしたちに対する神の愛が明らかにされたのである。わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さって、わたしたちの罪のためにあがないの供え物として、御子をおつかわしになった。ここに愛がある。」

ヨハネの手紙一 4:9-10 で、私たちは愛とは何か、「神の愛」の最も明確な姿を与えられます。それは曖昧でも抽象的な概念でもなく、イエス・キリストの御人格に現れた具体的で命を与える現実です。神の愛は感情や言葉だけで示されたのではありません。それは行動によって示されました。彼はそのひとり子イエスを、壊れた世界に、私たちの罪のための贖いの犠牲として遣わされました。これが誰もが知り得る最大の愛です。

この愛の驚くべき点は、私たちがまだ神から遠く離れているときに与えられたことです。私たちが先に神を愛したのではなく、神が先に私たちを愛してくださいました。神への私たちの愛は常に彼の愛への応答です。私たちが罪と反逆の中にあったにもかかわらず彼が私たちを愛したという事実が、この愛を根本的で美しいものにしています。それは無条件で、値せず、犠牲的です。

この愛はまた、人生を変えるものです。ヨハネは、キリストを通して私たちが生きると言います。これは単なる肉体の命ではなく、霊的な命、すなわち神との永遠の命なのです。イエスを私たちのために死なせることによって、神は私たちにご自身への帰路を、和解する方法、神と平和を持つ方法、そして神が私たちのために計画した命の豊かさを体験する方法を提供してくださったのです。イエスが究極の犠牲を払った十字架は、神の愛の定義的な瞬間となり、私たちと神との関係を永遠に変えるのです。
この愛を振り返るとき、私たちはただ受け取るだけでなく、それを反映するように呼ばれています。この愛は私たちが享受するためだけではなく、世界と分かち合うためのものです。神の私たちへの愛の深さを本当に理解するとき、それは私たちに同じように犠牲的な愛を他者に示すように促し、神が私たちに示してくださったのと同じ恵みと憐れみをもって愛するように導きます。

「神の愛は感情でも、一時的な情緒でもありません。それは意志の意図的な行為であり、ふさわしくない者に心を注ぎ出す決断です。」

— ティム・ケラー

4月2日

聖書箇所: ヨハネの手紙一 4:9-10

「これが神が私たちに愛を示した方法です：神はそのひとり子を世につかわし、彼によってわたしたちを生きるようにして下さった。それによって、わたしたちに対する神の愛が明らかにされたのである。わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さって、わたしたちの罪のためにあがないの供え物として、御子をおつかわしになった。ここに愛がある。」

ヨハネの手紙一の力強い節で、私たちは愛の究極の啓示、すなわち神の私たちへの愛に直面します。この愛は抽象的でも受動的でもなく、活動的で、具体的で、犠牲的です。神は「私はあなたを愛しています」と遠くから言うだけではなく、最も深い方法でそれを証明されました。彼は唯一の御子、イエス・キリストを壊れた堕落した世界に送り、私たちの罪のための贖いの犠牲となるようにされました。これが救いをもたらす愛であり、私たちを変える愛であり、命を与える愛です。

ヨハネがここで愛をどう定義しているかに注目することが重要です。彼は愛を人間の愛情として定義せず、私たちの神への愛に基づいてもいません。この箇所によれば、愛は神が私たちに向けて取った主導権です。私たちが先に神を愛したのではなく、神が先に私たちを愛してくださいました—私たちがまだ彼の敵であり、罪に迷っていたときにです。これが福音を定義する愛です。神が私たちの壊れた状態に手を伸ばし、恵み、あわれみ、赦しを差し伸べることです。

御子を送られた神の犠牲的な愛は、私たちの人生の土台です。イエスを通して、私たちは生きる機会を与えられました。それは単に肉体的な命だけでなく、霊的に、そして永遠に生きることを意味します。十字架での死を通して、イエスは私たちが神と和解し、罪を赦され、神との関係の中で真の命を経験できる道を開いてくださいました。これこそが最も純粋な愛であり、愛する者のためにすべてを捧げる愛です。

この愛を振り返るとき、それは私たちに同じように他者を愛することを強く促します。神の愛を深く理解し、受け取るほどに、私たちはこの愛を切実に必要としている世界へと反映させるように召されています。神の愛は独り占めするものではなく、分かち合うべき賜物であり、宣べ伝えるべきメッセージなのです。

「最高の愛は愛されているから愛するのではなく、愛されていないときに愛するものです。」

— ウォッチマン・ニー

4月3日

聖書箇所: ガラテヤ書 2:20

「わたしはキリストと共に十字架につけられた。生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである。しかし、わたしがいま肉にあって生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神の御子を信じる信仰によって、生きているのである。」

この力強い聖句の中で、使徒パウロはキリスト者の生き方の核心を語っています。「私はキリストと共に十字架につけられた。」この言葉は一見シンプルに思えますが、その意味は非常に深遠です。キリストと共に十字架につけられるとは、私たちの古い罪深い自己がキリストと共に十字架で死んだことを認めることを意味します。もはや古い「私」が生きているのではなく、キリストが私たちのうちに生きておられるのです。これはキリスト者の生き方の土台となる真理です。私たちのアイデンティティは、もはや過去や自分自身の力に根ざしているのではなく、キリストの内にある新しい命に根ざしているのです。

イエスの十字架は単なる歴史的事件ではなく、すべての信者にとって進行中の現実です。キリストと共に十字架につけられることは、彼の死に参加し、したがって彼の復活に参加することを意味します。

今、私たちが肉体において生きる命は、イエス・キリストへの信仰によって特徴づけられます。それは明け渡しと依存の命であり、すべての瞬間が彼の愛と恵みによって支えられていることを認めます。私たちはもはや自分の目的や野心のために生きるのではなく、彼の栄光のために生き、世に彼の愛と聖さを反映します。これは絶え間ない信頼を必要とする命—私たちを愛し、私のためにご自身を捧げられたお方への信仰です。

この聖句を黙想するとき、私たちはキリストと共に十字架につけられるとはどういうことかを深く考えるよう招かれています。私たちは、自分の古い自己がキリストと共に死んだことを意識して生きているでしょうか？ そして、今やキリストが私たちの内に生きておられることを実感しているでしょうか？ この現実は、私たちの生き方、人間関係、そしてこの世界における使命にどのような影響を与えるのでしょうか？

「十字架は命への道、自由への道、平安への道です。それは苦しみの道ですが、勝利の道でもあります。」

— ディートリヒ・ボンヘッファー

4月4日

聖書箇所: ルカによる福音書 22:39-40

「イエスは出て、いつものようにオリブ山に行かれると、弟子たちも従って行った。いつもの場所に着いてから、彼らに言われた、『誘惑に陥らないように祈りなさい。』」

この聖句で、イエスは近づく試練の重荷を知りながら、オリーブ山で孤独と祈りを求めている姿が見えます。弟子たちはそこまで彼に従いましたが、この重大な瞬間に、イエスの焦点は迫り来る嵐ではなく、祈りの必要性にありました。彼が直面しようとする戦いは魂の戦いでしたが、彼は弟子たち、そして私たちにとって、祈りが誘惑を克服し、試練の中で強くあり続ける鍵であることを理解していました。

イエスの言葉、「誘惑に陥らないように祈りなさい」は、招きであると同時に警告でもあります。弟子たちはこれから起こることを知らず、彼らが完全に理解していない方法で備えられていました。イエスは彼らの弱さ、それは私たちの弱さと同じものが誘惑の瞬間に露わになると知り、彼らに祈り、神から力を求めるよう促しました。

「誘惑に陥る」という表現は、神の助けなしには、私たちが人生の試練や圧力に対していかに脆弱であるかを鋭く思い起こさせます。誘惑は常に突然の攻撃として現れるわけではなく、むしろ、私たちが霊的に弱っていたり、油断していたりする隙をついて、ゆっくりと、巧妙に心の中に入り込んでくることが多いのです。このことをよく知っておられたイエスは、弟子たちに祈るようにと命じました。それは単に守りを求めるためだけでなく、誘惑に直面したときに揺るがずに立ち続ける力を得るためでもあったのです。

私たちの人生で、弱さの瞬間に祈りの必要性をどれほど見くびっているでしょうか。祈りは受動的な活動ではなく、神の力への積極的な明け渡しであり、抵抗し、忠実であり続け、彼の導きを信頼する力を神に求めることです。イエスは祈りが克服の鍵であることを知り、祈りによって前方の試練に備える力を得ました。

「人生で最も重要なことは何が起こるかを知ることではなく、彼を知り、彼が許すすべての状況の中で堅く立つことを学ぶことです。」

— A.W.トーザー

4月5日

聖書箇所: ルカによる福音書 22:42-44

「『父よ、みこころならば、どうぞ、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの思いではなく、みこころが成るようにしてください。』そのとき、御使が天からあらわれてイエスを力づけた。イエスは苦しみもだえて、ますます切に祈られた。そして、その汗が血のしたたりのように地に落ちた。」

これらの聖句の中で、私たちはゲツセマネの園にいるイエスの姿を見ます。彼は地上での働きの中で最も深い苦悩に直面しておられました。迫りくる苦しみを前にして、その魂は悲しみに打ちひしがれています。イエスは父なる神に祈り、もし可能であれば別の道があるかと願われました。しかし最終的には、ご自身の意思ではなく、神の御心に従う決断をされました。「しかし、わたしの願いではなく、御心がなされますように。」この言葉こそ、真の降伏の本質を表しています。

この園での瞬間は、肉体の苦悶だけでなく、人類の罪の重荷と贖いの代価の感情的、霊的な混乱についてです。完全な神でありながら完全な人間であるイエスは、来るべきものの痛みと格闘しますが、服従を選びます。彼は恐れから苦しみを取り除いてほしいと求めるのではなく、父と私たちへの愛から求めます。

これが私たちが従うべき模範です。神の私たちの人生への意志と闘い、苦しみや困難を避けたいと思うことがどれほどあるでしょうか。それでも、イエスは服従の道が、たとえ痛みを伴うものであっても、神の栄光と彼の永遠の計画の成就につながることを示します。彼の最も暗い時に、彼は父の意志の善良さと知恵を信頼しました。

ここでのイエスの服従は、神を完全に信頼することが何を意味するかを力強く思い出させます。たとえ道が困難であっても、勝利への道は明け渡しによって舗装されています。

「クリスチャンであることは、すべてにおいてキリストに従う準備ができていること、苦しみに至るまでです。自分の欲望を明け渡す意志があるときにのみ、彼の栄光を真に経験できます。」

— ジョン・ストット

40 DAYS OF DEPTH

第6週

開けた水平線

4月7日 – 4月12日

KOBE UNION CHURCH

第 6 週: 開けた水平線 (Open Horizon)
4 月 7 日

聖書箇所: ルカによる福音書福音書 22:48-51

「そこでイエスは言われた、「ユダ、あなたは接吻をもって人の子を裏切るのか」。イエスのそばにいた人たちは、事のなりゆきを見て、「主よ、つるぎで切りつけてやりましょうか」と言って、 そのうちのひとりが、祭司長の僕に切りつけ、その右の耳を切り落した。イエスはこれに対して言われた、「それだけでやめなさい」。そして、その僕の耳に手を触れて、おいやしになった。」

ゲツセマネの園の場面は、ユダが群衆を連れてイエスを裏切りに来たときに劇的な展開を迎えます。友情と愛情の象徴である「接吻」で、ユダは彼を無条件に愛して下さった方の運命を決定づけました。裏切りの中で、イエスは悲しみと戒めの混ざった声で語ります。「ユダよ、あなたは接吻をもって人の子を裏切るのか？」イエスは裏切りの深さを認識しますが、怒りや暴力で報復しません。

イエスが逮捕された直後、弟子たちは混乱と恐れの中で衝動的に反応し，そのうちの一人が大祭司のしもべに斬りかかり、耳を切り落としてしまいます。しかし、いつも憐れみ深いイエスは、その暴力を戒めて言われました。「もう、それでよい。」そして、そのしもべの耳を癒されました。イエスの応答は報復ではなく、回復でした。その混乱のただ中で、イエスは平和と癒しのひとときをもたらされたのです。

裏切りと暴力に直面したこの癒しの行為は深いものです。彼を裏切り、彼を害する者たちを非難するあらゆる権利があったイエスは、代わりに彼が提供に来た愛と恵みを現すことを選びました。彼の敵さえ癒す彼の意志は、私たちキリストの従者としての召しが、怒りで報復することではなく、裏切り、誤解、不正の中でさえ彼の愛を反映することであることを教えています。

私たちが不当な扱いを受けたとき、怒りで反撃し、自分を守りたいと思うことがどれほどあるでしょうか。イエスの模範は、真の強さとは恵みをもって応答することにあると教えてくれます。

「善に対して悪を返すのは悪魔的であり、善に対して善を返すのは人間的であり、悪に対して善を返すのは神的である。」

— ジョセフ・F・ニュートン

4月8日

聖書箇所: ローマの信徒への手紙 5:3-5

「それだけではなく、患難をも喜んでいる。なぜなら、患難は忍耐を生み出し、忍耐は錬達を生み出し、錬達は希望を生み出すことを、知っているからである。そして、希望は失望に終ることはない。なぜなら、わたしたちに賜わっている聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからである。」

レント（受難節）は私たちを黙想と悔い改めの季節へと招き、キリストの十字架に心を近づける時です。この季節に、私たちは「苦しみ」が信仰の敵ではなく、その土台の一部であることを思い起こします。パウロはローマの信徒への手紙 5 章 3〜5 節において、信仰者の人生における苦しみの変革的な力について力強く語っています。しかし、彼は単なる忍耐にとどまらず、むしろ「苦難をも喜んでいる」と述べ、苦しみが忍耐を、忍耐が練られた品性を、そして品性が希望を生み出す炉であることを示しています。

私たちは往々にして、あらゆる手段を使って苦しみを避けようとし、物質的なものや一時的な快楽の中に安らぎを求めます。しかし、神のことばはこの自然な本能に立ちはだかります。自己憐憫ではなく、神が定められたプロセスを信頼して苦しみに向き合うとき、そこに「忍耐」が生まれます。そして忍耐を通して、私たちの人格は深められていきます。それは単なる生き延びではなく、「変えられていくこと」です。困難な時が私たちを壊すのではなく、揺るがぬ希望を築き上げていくのです。その希望は失望に終わることがありません。それは、神の永遠の愛が聖霊によって私たちの心に注がれているからです。

これがレントの真の美しさです。困難を避けることではなく、十字架の道に従う中で神が私たちの内に成し遂げる贖いの業にあります。キリストの苦しみの中で、私たちは希望の全貌を見ます。私たちもその物語に招かれています。自分の試練を通じて、神の愛の深さ、決して失敗せず、失望しない愛を発見します。今日、あなたの人生の苦しみを、神があなたの中に忍耐、品性、希望を働かせていると信頼して受け入れる方法は何でしょうか。レントが単なる回避の時ではなく、霊的変容の時となるにはどうすればよいでしょうか。

「誰でもできる最も偉大なことは、苦しみのただ中で神と共にいることです。なぜなら、そこにこそ希望が最も豊かに実現されるからです。」

— エリザベス・エリオット

4月9日

聖書箇所: ローマの信徒への手紙 7:21-23

「そこで、善をしようと欲しているわたしに、悪がはいり込んでいるという法則があるのを見る。すなわち、わたしは、内なる人としては神の律法を喜んでいるが、わたしの肢体には別の律法があって、わたしの心の法則に対して戦いをいどみ、そして、肢体に存在する罪の法則の中に、わたしをとりこにしているのを見る。」

ローマの信徒への手紙 7:21-23で、パウロはすべての信者が直面する内なる葛藤について、率直かつ生々しく語っています。彼のうちには「働いている別の法則」があり、善を行いたいという願いにもかかわらず、悪が共にあるというのです。彼の心は神の律法を喜んでいるのに、それとは別の力が働いており、心の法則に戦いを挑んでいます。この内的な戦いこそ、聖なる生き方を願いながらも、自らの弱さと失敗を痛感しているすべてのクリスチャンの現実なのです。

この葛藤は、私たちがあまりにもよく知っているものです。私たちは良い意図をもって出発し、神を心から愛し、神の戒めに従い、御心に従って生きたいと願います。しかし、パウロが語ったように、善を行おうとするそのすぐそばに、悪がつきまとい、私たちを正しい道から引き離そうとします。これこそが、キリストによって贖われた者でありながら、なお罪の残滓と格闘するという、クリスチャンの生き方におけるパラドックスです。戦いは外側だけではなく、私たちの思い、欲望、そして選択の中で繰り広げられる、内なる戦いでもあるのです。

この箇所におけるパウロの正直さは、慰めであると同時に、私たちに問いかけを与えるものでもあります。この葛藤があること自体が霊的成長の証であり、失敗の印ではないということに、私たちは励まされます。この戦いに気づいているという事実こそ、神が私たちの内に働いておられる証拠であり、何が正しく、何が間違っているのかを見分けさせてくださっているのです。私たちの内にあるこの戦いは、罪との格闘の中で私たちがどれほど神の恵みと助けを必要としているかを思い起こさせてくれます。

あなた自身の人生に、パウロが語ったような内なる葛藤を感じていますか？善と悪との間で戦いを感じる具体的な領域はどこでしょうか？その戦いにおいて、神の恵みにもっと頼るにはどうすればよいでしょうか？

「クリスチャンとしての生き方は、戦いを避けることではなく、キリストがすでに戦争に勝利してくださったことを信じることです。」

— ティム・ケラー

4月10日

聖書箇所: ローマの信徒への手紙 15:13
「どうか、望みの神が、信仰から来るあらゆる喜びと平安とを、あなたがたに満たし、聖霊の力によって、あなたがたを、望みにあふれさせて下さるように。」

ローマの信徒への手紙15章13節で、パウロは信者たちへの美しい祈りを捧げています。それは、神を信頼しながら、喜びと平安で満たされるようにという祈りです。この節は、神への信頼と、神が与えてくださる豊かな希望との深い関係を思い起こさせてくれます。希望は私たち自身で作り出すものではなく、すべての希望の源である神から来るものです。

パウロの祈りは、私たちが神をより完全に信頼することで、私たちの心が喜びと平安で満たされるようにというものです。これらは一時的な感情や状況による慰めではなく、神だけが与えることのできる深く根ざした超自然的な賜物です。喜びと平安は、神がすべてを支配しておられ、無条件に私たちを愛してくださり、私たちの未来が神の中で確かなものであることを知ることから生まれる実です。

この希望は単に私たちの内に留まるものではなく、あふれ出るものです。神の喜びと平安を経験するにつれて、私たちはこの希望を他人と分かち合うよう呼ばれます。聖霊の力がこのあふれを可能にし、しばしば絶望的に感じる世界で希望を生きることを助けます。私たちの人生における聖霊の働きによって、私たちは言葉だけでなく、行動と態度で希望の証人となるのです。

あなたはどうすれば神への信頼を深め、神の喜びと平安を経験することができるでしょうか？特に苦しんでいる人々に対して、あなたが持っている神への希望をどのように溢れさせ、分かち合うことができるでしょうか？

「希望は単なる願望ではなく、神の御性質と約束に基づいた確信に満ちた期待です。」

— ジョン・パイパー

4月11日

聖書箇所: ローマの信徒への手紙 12:9-13

「愛には偽りがあってはならない。悪は憎み退け、善には親しみ結び、兄弟の愛をもって互にいつくしみ、進んで互に尊敬し合いなさい。熱心で、うむことなく、霊に燃え、主に仕え、望みをいだいて喜び、患難に耐え、常に祈りなさい。

ローマの信徒への手紙 12:9-13は、クリスチャンの集まりが信仰を具体的で愛に満ち、犠牲を伴う形で生きるようにとの力強い勧めです。パウロはまず、誠実な愛への招きから始めます。それは、神の御性質に深く根ざした本物の愛です。それは単なる感情ではなく、悪を拒み、良いものにしがみつく行動です。この愛こそが、この箇所でパウロが与える他のすべての戒めの土台となります。

クリスチャンの生き方は、他者への過激な愛によって特徴づけられます。パウロは私たちに、お互いに献身し、自分よりも他者を尊敬するように教えています。これは、認識や地位を求める愛ではなく、他者の利益を考え、謙虚で自己を与える愛です。自己中心的で競争的な態度がしばしば奨励されるこの世の中で、お互いを自分よりも尊敬するようにという呼びかけは、文化に逆らう命令であり、キリストの心を反映しています。

しかし、パウロは愛だけで終わりません。彼は愛と奉仕を結びつけています。信者たちに、熱心さを欠かず、霊的な熱意を保ち、すべてのことにおいて主に仕えるように励まします。この熱意は、個人的な利益のためではなく、神の栄光と神の民の益のためにあります。それは、主に対する喜びの希望、苦難の中での忍耐、そして祈りへの絶え間ない献身です。

最後に、パウロは寛大さとおもてなしの重要性を強調します。困っている人々と分かち合い、訪問者を迎えることは、パウロが語る愛と奉仕を実践する具体的な方法です。これは、ただ言葉で語る愛ではなく、行動に移される愛です。それは、困っている人々に手を差し伸べ、見知らぬ人々を迎え入れ、神の心を世界に示すものです。

あなたは、他者との関係の中で誠実な愛をどのように生きることができますか？

「クリスチャンの行き方とは、愛を感じることではなく、愛を行うことです。」

— C.S.ルイス

4 月 12 日

聖書箇所: ルカによる福音書 22:60-62

「ペテロは言った、「あなたの言っていることは、わたしにわからない」。すると、彼がまだ言い終らぬうちに、たちまち、鶏が鳴いた。主は振りむいてペテロを見つめられた。そのときペテロは、「きょう、鶏がなく前に、三度わたしを知らないと言うであろう」と言われた主のお言葉を思い出した。そして外へ出て、激しく泣いた。

この感動的な瞬間に、イエスの最も近い弟子の一人であるペトロは、イエスが予言した通り、三度彼の主を否みます。ペトロの失敗の深さは、鶏が鳴く音によって示され、彼が自分の主人を裏切ったその瞬間を告げます。その瞬間、イエスは振り返り、直接ペテロを見つめ、彼らの目が合います。

イエスの視線が非難のものではなく、愛のものであることは重要です。それはペテロの弱さを理解し、その瞬間の悲しみを伝える視線です。怒りの視線ではなく、イエスが以前ペテロに語った言葉を思い起こさせるようなまなざしです。この視線には、悔い改めへの招きがあり、回復への優しい後押しが込められています。

ペテロが自分の失敗を悟ったその瞬間、彼は深く後悔し、激しく泣きます。この涙は真の悔い改めを意味しています—私たちが無条件に愛してくださる方にどれほど深く失敗したかを悟った結果の悔い改めです。しかし、この悲しみの瞬間にも、希望があります。この涙こそが回復への第一歩だからです。ペテロの涙は、彼の癒しの始まりです。

私たちもまた、しばしば失敗します。私たちは行動、言葉、選択によってイエスを否みます。しかし、私たちの失敗の中で、イエスの愛とあわれみの視線は常にあり、私たちを彼に呼び戻します。彼の恵みは私たちの価値に基づくのではなく、彼の愛と私たちを回復させたいという欲求に基づいています。

ペテロの物語は彼の涙で終わりません。それは回復の旅の始まりに過ぎません。イエスは復活後、ペテロに特別に手を差し伸べ、三度彼に「私を愛するか？」と問い、彼に羊を養うように命じました（ヨハネ 21:15-17）。ペテロの失敗は、神に使われる資格を失わせるものではありませんでした。それは彼の変革の過程の一部だったのです。

「クリスチャンとしての生き方は完璧な生き方ではなく、悔い改めの人生であり、すべての失敗が神の恵みとあわれみを体験する機会となります。」

— R.C.スプロール

40 DAYS OF DEPTH

第7週

生きる岸辺

4月14日 – 4月19日

KOBE UNION CHURCH

第 7 週: 生きる岸辺 (Living Shores)

4 月 14 日

聖書箇所: ルカによる福音書 22:67-69

「『あなたがキリストなら、そう言ってもらいたい」。イエスは言われた、「わたしが言っても、あなたがたは信じないだろう。また、わたしがたずねても、答えないだろう。しかし、人の子は今からのち、全能の神の右に座するであろう。』」

この箇所では、イエスが宗教的権威者たちの前に立ち、冒涜の罪で告発され、彼を信用を失わせようとする者たちの尋問を受けています。彼らは「あなたがメシアなら、私たちにそう言いなさい」と要求します。これは真実を求める問いではなく、彼を言葉で罠にかけようとする挑戦です。イエスは彼らの心を知っており、知恵と自制を持って答えます。彼の言葉は真実であると同時に、彼らの不信仰を告発するものでもあります。イエスは、彼らがたとえ真実を語ったとしても、決して信じないことを知っていました。

しかし、イエスは真実を宣言することを避けません。彼は「これから人の子は力強い神の右に座るでしょう」と宣言します。この力強い声明で、イエスは拒絶と迫り来る苦しみに直面しながらも、彼の神聖な権威と主権を確認します。彼は嘲笑と暴力が待つにもかかわらず、神の右での将来の栄光を大胆に指し示します。

この瞬間は、私たちがキリストが誰であるかという真実を証しするよう呼ばれるときにしばしば直面する挑戦を思い起こさせます。イエスのように、私たちは反対、誤解、そして拒絶に直面することがあります。それでも私たちは、真実にしっかりと立つように呼ばれています。イエスが父の右の座に座し、すべての権威と力を持って支配しておられることを知っているからです。彼の証しは揺るぎないものであり、私たちもその揺るがない真実に自分を合わせるように呼ばれています。

私たち自身の試練の時に、福音の真実は人間の信じることや承認に依存していないことを思い起こすよう招かれています。イエスは、その真実が拒絶されることを知っていながらも、それを宣言しました。そして、イエスは私たちにも同じようにするように呼びかけています。私たちの証しは他者の反応によって形作られるのではなく、キリストが誰であるかという永遠の真実によって形作られるべきです。

「真理とは人気があるものではなく、永遠であるものです。」

— A.W.トーザー

4月15日

聖書箇所: ルカによる福音書 23:3

「ピラトはイエスに尋ねた、「あなたがユダヤ人の王であるか」。イエスは「そのとおりである」とお答えになった。

イエスがピラトの前で裁判を受けるこの瞬間、投げかけられた質問は大きな意味を持ちます。「あなたはユダヤ人の王ですか。」世界の権威を代表するピラトは、真実に対する好奇心からではなく、目の前の人間の政治的な性質を理解しようとしてこの質問を投げかけています。彼は、ローマの王権の概念に基づいて、イエスを有罪にする理由か、無罪にする理由を探しているのです。

しかし、イエスは静かで自信に満ちた返答を通して、より深い真実を明らかにします。「あなたが言った通りです。」この言葉の中で、イエスはその称号を否定することなく、また世俗的な王権の理解に従うこともありません。彼の王国はこの世のものではなく、彼の支配は人間の支配者たちの権力構造とは異なります。ピラトの問いは政治的、時間的、物質的なものであるのに対し、イエスの答えははるかに大きな現実、時や場所に縛られず、父の御心によって成り立つ神の永遠の王国を指し示しているのです。

世が権威をどう見るかと神の王国がどう働くかとの間には深い違いがあります。ローマ総督であるピラトは、王権を力と支配、制御と強さとして理解しました。彼は暴力や操作で権力を奪う意図がなく、嘲られ、打たれ、自己防衛のために剣を上げずに殺される王を理解できませんでした。

ここでのイエスの声明は、彼の王権が地上の基準で定義されないことを理解する招きです。彼の権威は謙遜、犠牲、父の意志への服従を通して明らかにされます。彼の明らかな弱さの中で、彼はこれまで世が知った最も偉大な王であり、彼の王国はすべての地上の王国を超えます。

クリスチャンとして、私たちは自問しなければなりません。彼の王権の本質を真に理解しているでしょうか。

「クリスチャンとしての生き方は、私たちが何を知っているかではなく、誰を知っているか、そして誰にゆだねるかの問題です。」

— ウォッチマン・ニー

4月16日

聖書箇所: ルカによる福音書 23:18-21

「ところが、彼らはいっせいに叫んで言った、「その人を殺せ。バラバをゆるしてくれ」。このバラバは、都で起った暴動と殺人とのかどで、獄に投ぜられていた者である。ピラトはイエスをゆるしてやりたいと思って、もう一度かれらに呼びかけた。しかし彼らは、わめきたてて「十字架につけよ、彼を十字架につけよ」と言いつづけた。」

この目の前の場面は、深い皮肉と悲しみに満ちています。ローマの総督であるピラトは、無実の人であるイエスを解放しようとしますが、群衆は反乱を起こし、殺人を犯した悪名高い犯罪者バラバを解放するよう要求します。この二人の人物、義なる王イエスと反逆者バラバの間での選択は、救いの歴史の中で重要な瞬間です。イエスよりもバラバを選んだ群衆の決定は、単なる歴史的な出来事ではなく、真実に対する人間の心の反逆を反映しています。

この瞬間に、私たちはキリストを拒絶し、偽りを受け入れる人間の傾向を見ることができます。バラバという名前は「父の子」を意味しますが、これは真の父の子であるイエスの偽物のような存在です。バラバは暴力に基づく自由を示しますが、イエスは真の自由、すなわち罪、死、そして悪の支配からの自由を示します。

ピラトが繰り返す質問である「この人が何の罪を犯したのか」は無実を明らかにします。彼は何も悪いことをしていない、彼は非の打ち所がないのです。それにもかかわらず、群衆の叫び声はますます大きくなり、彼の十字架刑を要求します。これは人間の現実の悲劇です。命を与えてくれるその方を拒絶し、滅びの道を選んでしまうのです。

バラバとイエスの選択は、その日群衆が直面した決断だけでなく、私たちが日々直面しなければならない決断でもあります。私たちは罪の反逆を選び、それに伴う偽りの自由を選ぶのでしょうか、それとも真の自由を提供するキリストという王に従うことを選ぶのでしょうか。

「私たちのすべての失敗の根源は自己中心的な生き方、神の御心に従わない「私」にあります。」

— ウォッチマン・ニー

4 月 17 日

聖書箇所: ルカによる福音書 23:34

「そのとき、イエスは言われた、「父よ、彼らをおゆるしください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」。人々はイエスの着物をくじ引きで分け合った。」

イエスが十字架にかかり、想像を絶する肉体的な苦しみを受けているその時、彼は聖書の中で最も深遠で恵みに満ちた祈りの一つを捧げました：「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか、彼らはわからないのです。」この言葉は福音の心を反映しています—神の計り知れない赦しが、彼の苦しみと死に積極的に関わった者たちにまで及ぶということです。

この瞬間、イエスは自分をあざける兵士たち、彼を嘲笑う群衆、そして偽りの裁きで彼を非難した宗教指導者たちに対してだけでなく、すべての人類に向けて語っています。彼の祈りは深い憐れみの祈りであり、彼らの行動の根源は無知であり、それは罪から来る盲目であることを理解しています。

キリストの十字架での赦しは、単なる歴史の出来事ではなく、それを受け入れることを選ぶ私たち一人ひとりにとって、常に生きた現実です。イエスは父の御心に完全に従うことによって、赦しの究極の行為を示し、私たちにもその足跡を追うように呼びかけています。

赦しは個人的な罪を放すことだけではありません。それは神の愛を反映する力強い恵みの行為です。十字架でイエスが提供する赦しは条件付きではなく、無条件であり、彼らの行動の重大さに気づいていない者たちにまで及んでいます。イエスは兵士たちが悔い改めるのを待たず、彼らが自分の誤りを認める前に赦します。この根本的な愛と恵みの行為は、私たちにも呼びかけです。

私たちもまた、キリストの弟子として、そのように赦しを広げるように召されています。赦しを求めない者に、過ちを認識していない者に、または自分が与えた傷の深さを決して理解しない者に対してもです。

「赦しは時々行う行為ではなく、常に持つ姿勢です。」

— マーティン・ルーサー・キング・ジュニア

4 月 18 日

聖書箇所: ルカによる福音書 23:40-43

「もうひとりは、それをたしなめて言った、「おまえは同じ刑を受けていながら、神を恐れないのか。お互は自分のやった事のむくいを受けているのだから、こうなったのは当然だ。しかし、このかたは何も悪いことをしたのではない」。そして言った、「イエスよ、あなたが御国の権威をもっておいでになる時には、わたしを思い出してください」。イエスは言われた、「よく言っておくが、あなたはきょう、わたしと一緒にパラダイスにいるであろう」。」

イエスの地上での命の最後の瞬間の一つで、十字架にかかっている二人の犯罪者との間に深いやり取りが交わされます。そのうちの一人はイエスをあざけるのですが、もう一人は深い確信の瞬間に仲間の犯罪者を叱り、イエスの無罪を認めます。この犯罪者は、自分の罪で有罪判決を受けていたにもかかわらず、イエスの中に何か特別なものを認めます。つまり、イエスが永遠の王国を支配する王であることに気づいたのです。
彼のシンプルで心からの願い、「イエス様、あなたの御国に来られるとき、私を思い出してください」という言葉には、キリスト教信仰の核心が表れています—イエスの神聖な王権の認識と救いの希望です。

イエスの答えは即座で、深い憐れみを込めたものでした。「まことに、あなたに言います。今日はあなたは私と一緒に楽園にいます。」そこには条件も要件もなく、この犯罪者が自分の価値を証明する必要もありません。彼は最後の瞬間に、イエスへの信仰によって、行いではなく、永遠の命の約束を受け取ります。

このやり取りは、神の素晴らしい恵みを美しく思い起こさせてくれます。それは、イエスに向かうのに遅すぎることは決してないということを教えてくれます。どんなに遠くに行ってしまったとしても、どんな過ちを犯してしまったとしても、もし悔い改めと信仰をもってイエスに向かうなら、私たちは永遠の命の約束を受けることができるのです。

十字架のにかけられた盗人がイエスとの出会いの後に善行をする機会を持たなかったように、私たちもまた、私たちの救いは自分たちが何をできるかではなく、イエスが私たちのためにしてくださったことに基づいていることを思い出させてくれます。イエスは今日も私たち一人ひとりに同じ恵みの申し出をしています。彼と共に楽園に入ることを信じる者には無償で与えてくださるのです。

「神の恵みは我々のすべての罪よりも大きい。」

— ジュリア・ジョンストン

4月19日

聖書箇所: ルカによる福音書 23:44-46

「時はもう昼の十二時ごろであったが、太陽は光を失い、全地は暗くなって、三時に及んだ。そして聖所の幕がまん中から裂けた。そのとき、イエスは声高く叫んで言われた、「父よ、わたしの霊をみ手にゆだねます」。こう言ってついに息を引きとられた。」

イエスの十字架での人生の最後の瞬間に、世界は神秘的な闇に落ちます。正午から午後三時まで、太陽が輝かなくなり、不気味な静寂が地を包みます。この物理的な闇は、イエスが我々の罪の重荷を負ったとき人類にかかった霊的な闇を映し出しています。しかし、この深い苦しみと地球が覆われる中で、イエスは信頼と委ねの言葉を発します。「父よ、私の霊をあなたの御手に委ねます。」

これらの言葉は、イエスが完全に父の御心に委ねることを宣言するものです。十字架で計り知れない身体的、感情的な痛みを耐えながら、彼は自分自身を完全に神に委ねます。イエスは単に命を捧げているのではなく、完璧な信頼の中で、自分の霊を父の御手に委ねているのです。イエスは、その死が世界のための神の贖いの計画を成就させることを知りながら、父にすべてを委ねています。この最後の言葉の中に、子と父との親密な関係が見られます。この関係は、従順、信頼、愛に基づいています。

私たちにとって、この十字架での瞬間は、最も究極の委ねの行為を表しています。イエスは私たちに道を示してくださいます。試練、苦しみ、そして死さえも直面するとき、私たちもまた愛する父の御手に自分の命を委ねることができるのです。私たちの苦しみが常に理解できるわけではありませんが、私たちが自分の命を神の御手に委ねるとき、神の主権と善良さに信頼していることを確信できます。十字架でのイエスの委ねの行為は、単なる従順の模範ではなく、私たちに自分の命を神に信頼して委ねることへの招きであり、神は誠実であることを知っているのです。

神殿の幕が裂けることは、人類と神との間にあった障壁が取り除かれたことを象徴しています。イエスの犠牲によって、すべての人々に神へのアクセスが可能になりました。もはや私たちは神と私たちの間に立つ祭司を必要としません。イエスを通して、私たちは今や大胆に神の御前に進み出ることができるのです。垂れ幕は裂け、隔ては壊れ、父への道は開かれました。

イエスの最後の言葉を振り返るとき、真の平安と休息は、我々が完全に神

に自分自身を委ね、私たちの命が神の御
手の中で守られていることを知るときに
のみ得られることを知るのです。

「クリスチャンの生き方の本質は、キリストのために生きようとすることではなく、
キリストが私たちの中に生きてくださることを許すことです。」

— A.W.トーザー

（おまけ）

聖書箇所: コリントの信徒への手紙二 5:21

「神はわたしたちの罪のために、罪を知らないかたを罪とされた。それは、わたしたちが、彼にあって神の義となるためなのである。」

福音の中心には、コリントの信徒への手紙二 5:21 にある驚くべき真実である「偉大な交換」があります。罪のないキリストが私たちの罪の重荷をすべて負い、代わりに私たちは彼の義を受け取るのです。この節は、贖いの全メッセージを要約しています。罪深い人間を神がご自身と和解させるための完璧な計画です。

罪のない神の子イエスは、我々が決して負うことのできない罪の罰を負われました。罪を知らない彼が、我々のために罪となりました。彼の完全な命は代償的な犠牲として与えられ、彼の死と復活を通して、私たちは神との関係を回復することができるのです。この交換は単なる取引ではありません。それは私たちの信仰の基盤そのものです。キリストの義は、私たちが何かをしたからではなく、彼の恵みと憐れみによって、私たちに帰せられるのです。

私たちは単に罪を許されるだけでなく、キリストの義で覆われているのです。これが福音の驚くべき美しさです。神は私たちを許すだけでなく、私たちに神の目における義の立場を与えてくださるのです。キリストにあって、私たちは自分の行いによってではなく、彼の完璧な生涯と犠牲的な死によって義と宣言されるのです。

キリスト教徒として、この真理は私たちを謙虚にし、畏敬の念で満たすべきです。私たちはこの義を受けるに値することを何もしていませんが、それにもかかわらず、神はそれを自由に私たちに提供してくださいます。それは神の愛と恵みの究極的な表れです。私たちの応答は感謝の気持ちであるべきです。私たちの救いは完全にキリストの業であり、私たち自身の行いによるものではないことを認識することです。この恵みは私たちに違った生き方を促します。私たちに与えられた義を反映するような生き方をし、日々の生活の中で神の愛と恵みを証しするように。

「神の義は贈り物であり、私たちが得ることのできるものではありません。それは、私たちの功績によるのではなく、イエスによって神が私たちに義を与えてくださるという福音の核心です。」

— テモシー・ケラー

40 DAYS OF DEPTH
KOBE UNION
神
SINCE
1871
戸
CHURCH
WWW.KOBEUNIONCHURCH.COM